

2 更新後の雑草対策 ～雑草に負けない牧草を育てる！～

(1) 掃除刈り 更新直後に発生する1年生の広葉雑草（タデ、シロザなど）が対象

雑草の生長点を刈り取ってしまうことで、雑草の生長、繁殖を抑える方法です。刈り取りのタイミング、刈り取り方などが重要になります。

a 刈り取り時期

一般に、は種後40～60日くらいで、雑草の草丈が20～30cmになった頃が目安です。

表1 掃除刈りのタイミングによる防除効果とチモシーへの影響

掃除刈り時期	雑草防除の効果	チモシーへの影響
早い	△	×(刈り取りによる生育抑制)
適期(草丈20～30cm)	○	○
遅い	×	×(雑草繁茂による生育抑制)

b 刈り取り高さ (図5)

15cm以下、5～10cmくらいの高さで刈り取ります(雑草の生長点は15cm程度)。

* 15cmより高く刈ると、雑草再生の可能性が高くなる

* 低すぎると牧草の再生が遅れる



図5 掃除刈りの刈り取り高さ

c 刈り刃の研磨

まだ根が浅い新播草地では、切れない刃で作業をすると、牧草を引き抜いたり根を傷めるなどの悪影響を及ぼします。刃はしっかり研いだものを使用しましょう。

d 刈り取った草の処理

刈り取った草が多い場合、そのまま放置すると日陰をつくり牧草の生長を阻害します。ロールペーラーで拾い、ほ場の外に持ち出しましょう。

刈り取った草が少ないようなら、そのまま全体に散らします。

(a) 搬出する場合

* 刈り取り後、速やかに集草、搬出する

* 牧草の根を傷めないよう、作業は低速運転で、優しく丁寧に

(b) 搬出しない場合

* 全体に広げるように刈り取る(ディスクモアが有効)

* モアコンディショナーの場合は、ウインドローを作らない

e アルファルファ混播草地の掃除刈り

(a) 基本の掃除刈りタイミング

アルファルファを定着させるためには、は種後60～80日後が刈り取りタイミングとなります。

- * 着蕾期から開花期の間で、再生芽(図6)が確認されたら刈り取り適期
- * 再生芽を刈り取らないように10～15cmの高さで刈り取る



図6 アルファルファの再生芽

(b) 牧草の主体はチモシー

アルファルファの定着を考えると、は種後60～80日後まで掃除刈りの時期を待つのが基本となります。しかし雑草が繁茂しすぎて、主となるイネ科牧草（チモシーなど）が弱ってしまえば元も子もありません。

- * ほ場を観察し、雑草の繁茂が著しい（チモシーが雑草に負けてしまいそうな）場合は、アルファルファ草地であっても早めの掃除刈りを！
- * 再生芽を刈り取らないよう、10～15cmの高さで刈り取る

(2) 牧草の生育を確保する

更新した年の牧草は、まだ根の張りが弱く枯れやすい状態です。牧草が枯れると裸地ができ、そこに雑草が繁茂します。しっかりと根を張った牧草で草地の密度を保つことが、雑草の侵入を防ぐことにつながります。

a 追肥

新播草地で生育が思わしくない、色が薄い、葉先が枯れるなどの状態が見られることがあります。養分の欠乏が考えられますので、追肥しましょう。(図7・8)



図7 養分不足により黄化したほ場



図8 追肥することで回復した

(a) 発芽後

生育不良の原因は、深起こしによりやせた土壌が上に上がってきた、あるいは表層からの肥料の流亡などが考えられます。

- * 化学肥料10～20kg/10a（窒素成分で2～4kg）を追肥する

(b) 掃除刈り後

更新時に入れる肥料（基肥）は、掃除刈りまでの生育に対する養分です。同年内に採草する場合は、掃除刈り後の追肥が必要です。採草しない場合でも、掃除刈り後の生育不良が見られたほ場には追肥をしましょう。

* 掃除刈り後、同年内に採草する場合は、維持草地と同じように追肥する

* 採草しない場合も、生育不良や養分の欠乏が見られたら10～20kg/10a(窒素成分で2～4kg)を追肥する

b 牧草の根を傷めない

(a) ほ場作業は慎重に！

更新後の牧草は、まだ根が弱く十分に張っていません。機械のスピードをゆるめ、優しく丁寧に、牧草の根を傷めない作業を心掛けましょう。

(b) 重機を入れない（タイヤ痕を残さない）

堆肥やスラリーの散布など重い機械を入れるとタイヤ痕ができます。タイヤ痕は、牧草の根を傷めることはもちろん、冬にアイスシートができる原因となります(図9・10)。極力、更新した年に重機は入れないようにしましょう。



図9 水が貯まるとアイスシートができる



図10 次年の春、タイヤ痕に沿って枯れた草地

※作溝法による簡易更新(後述)では、ほ場表面を攪拌しないため、比較的初年目から機械が入りやすくなります。

●更新作業の前に・・・草地のリフレッシュ！ サブソイラーの利用

経年草地では、機械や家畜による踏圧のため地表から10cmぐらいのところに特に固い土層ができています。

更新作業の前にこれを破碎して、土壌の通気性や透水性を良くし、牧草の根圏域を広げるのがサブソイラー施工です。

